

博士学位論文審査要旨

2012年1月21日

論文題目： 「潜在的難民」概念に基づくソーシャル・イノベーションの創発に関する研究
－「難民ナウ！」の取り組みを手懸りとして－

学位申請者： 宗田 勝也

審査委員：

主査：	総合政策科学研究科	教授	今里 滋
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	アンヌ・ゴノン
副査：	総合政策科学研究科	教授	月村 太郎

要 旨：

宗田氏は、本論において、「潜在的難民」という新たな概念を創出し、長きに亘って自身が取り組んできた難民支援のための情報発信活動を福島第一原発事故で新たに発生した福島県被災者へと拡張する理論的根拠と支援活動の実践を論じている。

序章では、「潜在的難民」概念が呈示され、その意義と有効性が論じられる。

第1章においては、実践の前提である、日本社会における難民問題の先行研究が俯瞰し、とくに実験場のように難民を扱いつづけてきた政府等の対応を批判的に検討している。

第2章では、京都のNPO経営のFM放送局で取り組んできた自作の難民問題専門情報番組「難民Now!」の業績が、第3章では、3.11東北大震災後の現地でのFM放送局開設を含めた支援活動の展開が、それぞれ述べられている。

第4章では、同志社大学の社会実験施設江湖館の蔵2階に設けたインターネット・スタジオを舞台として、福島からの避難者や原発問題の専門家等をゲストとして招いてUstreamを用いて原発問題に対する対話的考察を世界に発信した社会実験の記録である。

第5章は、難民と福島原発の事故による避難者の近似性を「構造的暴力」の視点から考察している。

そして、第6章は、困難な現実を前にして提起された「潜在的難民」のソーシャル・イノベーションに結びつく操作的概念としての意義と有効性を検証し、かつインターネット・メディアによる市民的公共性の展開と実現可能性について論究している。

本論は、潜在的難民概念の論証に若干の不十分性が見られるものの、しかし、それは、本論の核心でもあるインターネット・メディアを活用し鋭く現代日本が抱える困難な問題を剔抉するすぐれたソーシャル・イノベーションの実践の価値を損なうものではまったくない。よって本論文は、博士(ソーシャル・イノベーション)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2012年1月21日

論文題目： 「潜在的難民」概念に基づくソーシャル・イノベーションの創発に関する研究
－「難民ナウ！」の取り組みを手懸りとして－

学位申請者： 宗田 勝也

審査委員：

主査：	総合政策科学研究科	教授	今里 滋
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	アンヌ・ゴノン
副査：	総合政策科学研究科	教授	月村 太郎

要 旨：

宗田氏の学位申請論文について、2012年1月21日午後2時40分から午後3時40分まで、公聴会方式により口頭試問を実施した。まず、宗田氏自身が約30分間論文の概要についてのプレゼンテーションを行い、その後約30分間、宗田氏と審査委員との間で質疑応答を行った。

審査委員からは、社会実験相互間の関連性や概念装置の論理的一貫性等について確認や質問があったが、宗田氏はいずれに対しても理路整然と的確に回答を行った。

以上のことから、宗田氏の十分な研究能力を確認することができた。

また、外国語能力については、先行研究、関連研究の英語文献を広範囲に渉猟し咀嚼・消化しており、その理解、引用、参照においても誤りが無いことを確認した。したがって、研究に必要な外国語能力は十分であると判断した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目： 「潜在的難民」概念に基づくソーシャル・イノベーションの
創発に関する研究 「難民ナウ！」の取り組みを手懸りとして
氏 名： 宗田 勝也

要 旨：

本研究は、京都市中京区にあるコミュニティ FM 局の難民問題専門情報番組という、きわめて小さな営みから出発している。そして、その番組「難民ナウ！」の活動を丹念にたどることを通して、私たちに不可視化されてきた問題を掘り起こし、難民と呼ばれる人びとの関わりにおいて、これまでにない可能性を見出すことを目指したものである。

「難民問題を天気予報のように身近なものに」という願いを込め、2004 年から放送されているその番組は、毎回の放送のエンディングで繰り返していたように「世界中の子どもたちが、少なくとも自分の家で安心して暮らせる日を夢見て」制作されていた。そして、番組を通じた多様な人びととの出会いは、難民支援のネットワークを広げるとともに、番組制作グループ自身への問いを深めた。すなわち、当初の「難民問題を身近に」という目的は、「そもそも難民とは誰か」という問いかけをグループの内部に生み出すことになった。それとともに、難民問題を天気予報のように放送する自分たちは何者か、という自問が芽生えたのである。番組にとっての「難民問題」が、「難民(の)問題」から「難民(を取り巻く私たちの)問題」を含むものへと変容したとあってよい。そして、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災、及び、福島第一原子力発電所事故によって、東北地方に突然あらわれた「難民のような」状況に置かれた人びとを前に、その問いは、「難民(にいつでもなり得る存在としての私たちの)問題」へと接続されていった。

本研究においては、難民と呼ばれる人びととの関わりにおいて、これまでにない可能性を見出すことを目指した。「これまで」とは、難民受け入れ数の少なさから、「難民鎖国」と呼ばれた日本社会での難民に対する、十分な準備のないままの、制度と人の「生」を混同して試行される、あたかも実験場のような形で進められてきた関わりである。「これまでにない」とはいうまでもなく、実験場のように人を扱わない関わり、であった。

3・11 は、難民問題において、根本的な転換の糸口を与えた。それは、これまでの難民問題と日本社会との圧倒的な距離感が動揺したためである。どこか遠くで起こっているこ

と、自分たちの身の上には絶対に起こり得ないこと、という認識を持たれがちであった難民問題が、突如、自分たちの眼前に「難民のような」状況に置かれた人たちが現れたことによって、「明日は我が身」という厳しい現実を、一人ひとりに突き付けたためであることを論じた。

その上で、自分たちが、いつ難民になるか分からない状況の認識は、長年、日本社会において一貫して不可視化されてきた構図を直視する可能性を開く。それは、長きにわたり、日本が難民鎖国であり続けた理由であるとともに、原子力発電所設置の過程そのものでもある。それを受けとめるか、さらに目をそらせるかは私たちの判断に委ねられていることを指摘した。

そして、厳しい現実を直視することが時に困難であることを示した。例えば、歯痛を覚えても歯科医に行くことは思いのほか容易ではない。すぐに命に関わるとは考えにくいいため尚更である。また、一般的に親や教師は信頼すべき対象ではあるが、いつも正しい行いをとり続けるとは限らない。しかし、親や教師が正しくない行為をしているのではないかと立ち止まり考えることは容易ではない。本論では手懸りとして、過去の公害問題を例示した。大企業や国が間違った行いをするはずはない、という思いへの裏切りは、歴史の場面においてしばしば見受けられたことだからである。

本研究は、そうした困難を越えて、現実を直視するための試みを続ける「難民ナウ！」の取り組みに着目した。具体的には、とくに3・11以降、「難民ナウ！」が提起した「潜在的難民」という概念をとりあげた。この概念を手懸りとして、私たちの生命をきわめて脆弱な基盤の上に置いていた社会と、同時に、ある人たちの生命を、さらに脆弱な基盤の上に置いていた私たち自身の責任の所在を考察した。そして「これまでにない」難民問題への接近が可能になる道筋を明らかにした。

以下、本稿の流れを説明する。

序章で、研究全体の見取り図を示した。そして鍵概念である「潜在的難民」を考察するうえでの前提となる、「難民」概念の整理を行うことにより、本研究の視座を明らかにした。

第1章においては、日本社会における難民をめぐる状況を受け入れの歴史とともに整理した。なぜなら前章でみたように、本研究で事例としてとりあげる「難民ナウ！」は、2011年3月11日の東日本大震災発生まで、難民問題に関わっていたためである。そのため実践の前提であった、日本社会における難民問題について、先行研究や支援活動の記録を整理

し、「難民ナウ！」の活動の背景を明らかにする必要があった。とくに、十分な受け入れ準備のないまま行われたインドシナ難民への対応からの教訓を生かしきれず、2010年に開始された第三国定住事業の試行においても、制度と人の「生」を混同して行われる、あたかも実験場のような対応を批判的に検討した。

第2章、第3章は事例である。このうち第2章では、「難民ナウ！」設立から東日本大震災までの取り組みをまとめた。とりわけ、「難民(の)問題」としての「難民問題」から、「難民(を取り巻く私たちの)問題」としての「難民問題」に変容する過程を整理した。

また第3章においては、東日本大震災以降の取り組みを詳述した。震災及び津波の被災者に対する国際協力 NGO などの緊急援助活動の取材に始まった取り組みが、原発問題へと至る過程を整理した。ここでは、東日本大震災が「難民問題」を、「難民(にいつでもなり得る存在としての私たちの)問題」にしたことを確認した。

第4章においては、同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コースが、学位論文の執筆に際して、必須の要件としている社会実験の経緯をまとめた。事例である「難民ナウ！」の取り組みそのものが社会実験といえるが、とりわけ、同志社大学ソーシャル・イノベーション研究センターの協力のもとで、学外実験施設である「江湖館」に設置されたスタジオから配信が開始された番組「難民ナウ！TV」の取り組みをとりあげた。期間は、準備が始まった2011年9月9日からとなるが、特に配信が開始された2011年10月14日から11月17日までを対象としている。

以降が考察である。第5章においては、難民問題への取り組みが原発問題に結びついた理由について分析した。とくに「難民ナウ！」の取り組みを手懸りに、難民と原発事故による避難民の近似性を「構造的暴力」の観点から確認するところから考察を開始した。そして「なぜ難民ナウ！が原発の問題に関わったのか」という問いを立て、難民受け入れと原発設置の過程にある共通点に接近した。このうち、後者の共通点は、問題の所在を「見せまいとする力」として働き、政府が政策を進める上での「見せまいとする力」と共鳴し、「排除、固定化、隠蔽」につながるという構図であることを論じた。その中で、私たち一人ひとりの「生」が、どのような不安定な位置に置かれているのか、と同時に、より弱い立場の人の「生」をどのような不安定な位置に置いているのかを明らかにした。その際、過去の経験に学ぶため、西淀川公害訴訟の歴史や、イタリアの作家でアウシュビッツからの生還者であったプリーモ・レーヴィの言説などを参照した。

第 6 章は、困難な現実を前にして提起された、「潜在的難民」という言葉のもつ意味をさぐった。実験場のような関係を超えた関わりの可能性を浮かび上がらせることが目的であった。前章において明らかとなった排除、固定化、隠蔽の構図に対して、難民ナウ！が「潜在的難民」という言葉を用いて、きわめて小さな規模ではあるが活動をはじめたことに着目した。上野千鶴子の「当事者」概念を手懸りに、「潜在的難民」の分析を通して、本研究の目的でもある「難民との新たな関係構築の可能性」を明らかにした。

終章では先ず、第 4 章で見た社会実験の結果を踏まえつつ、「潜在的難民」概念による現場でのソーシャル・イノベーションの胎動を論じた。ここでは先ず、「ソーシャル・イノベーション」について整理したうえで、事例が、多くの要因や多様な主体が絡まりつつ、相互に影響しあっているうちに思いもよらない方向へと進んでいった過程を創発の観点から示した。最後にインターネットメディアによる市民的公共性の観点から結論を述べた。
(3760 文字)